

原小火事の夜

あの夜は私の家にとつても忘れられない事件があった。

夜に入って原町小学校が火事になり、離れているこの辺も騒ぎだった。私は見に行かなかつたが、近所の人々で野次馬に加つた人は大勢いたようだ。

騒ぎもおさまり、店を戸締まりし、平常通り床に入った。妻は、布団店の招待旅行で九州に行っていない。家には子供達と、弟子にしている妻の弟の康則、銀行に勤めている兄雄一郎の長女で姪の和子、皆で五人がいる。妻を入れると六人の大家族だ。

私は店に近い六畳に寝ていた。夜中十二時過ぎ、店内より変な音がするので目が覚めた。なんだろうと、店に出てみると天井から音がする、店は古い平屋の建物であつた。道路に出て見ると看板の陰に誰かがいる。

「誰だ」と大きい声で怒鳴ると、屋根の高い方に逃げて背を低くして動かない。私の声が大きいので隣の伊藤さんが起きてくる。その内義弟の康則が起きてきたので、「一〇番」に電話を掛けさせ、二階に寝ている姪の和子を起した。テナヤワンの大騒ぎをしているうち、三、四分でパトカーが到着した。

お巡りさんに「降りて来なさい」と云われたら、屋根の上で泣き出し「家に知れると困るんです」と言つて動かない、中学生くらいの子供である。梯子をかけ説得されて自力で降りた。勾配の急な屋根で、逮捕は危険なそつである。

降りてすぐ、お巡りさんは上着を脱ぎ子供の頭にすっぽりと被せた、未成年者に対する配慮であろう。私とお巡りさんで屋根に登つて見ると、驚いたことには瓦を十枚ばかり剥がし、屋根板を体に入れる位に鋸で切つてある。その下には店の天井があり、店内に侵入することは殆ど不可能だ。

明日連絡に来ますと云つて、パトカーは帰つて行つた。雨が降つてもよいように仮補修して寝床に入った。

午前中に東警察署のお巡りさんが来て、少年の取り調べの事柄を話してくれた。

少年は母子家庭で、母親は小学校の教師で一人っ子だそうだ。何処の学校に勤務しているかも名前も聞かなかった。母親は夜中に警察からの電話で起こされ、事情を話され警察に駆けつけ、泣いて申し訳ないと謝り、警察でも初犯で少年で再犯のおそれもないとみて一応帰宅させたそうだ。

そして「村上さんが、よければ許してやって戴きたいのです」と頭を下げられた。私は「結構ですよろしく願います」と告げた。お巡りさんは「伝えます感謝するでしょう」と言つて帰つていった。

間もなく大工さんが来て屋根を元通りに補修し、三十分位で終わったのに、「一人ぶんの手間を貰いました」笑つてお茶をのんびり飲み帰つていった。

その日の夜になつてから、店に入つてきた婦人が声を出して泣きだした。後ろには中学生くらいの男の子を従えている。すぐあの子供だなと思い、店で泣かれるのは人目が悪い、すぐ座敷に上げた。

座敷で親子は、平身低頭息子の非を詫び、許しを乞うた。息子がなぜあんな事をしでかしたか話してくれた。

「みんな私が悪いのです、以前からトランジスターラジオが欲しいとせがまれたのに、相手にならず駄目の一点張りでした。よつぽど欲しかったのでしよう、申し訳のしようもありません」

「二度とこんな事を起させません、戒めと今日の出来事を長く忘れさせない為、トランジスターラジオを買つてやりたいと思います」

そして九千円位のを買つて、何回も頭を下げ帰つていった。

あれから何年になるだろう。義弟の康則は高卒の二年後、姪の和子は高卒翌年の二月だった。どちらも孫がいる歳になっている。あの女教師や少年は幾つになつたのだろう。私は名前も知らないし、顔も覚えていない。我が家の前を通る事があれば思い出すだろうか。

立派に一家を築きよき父親になつて信じていることを信じたい。